

風に紅葉考——百花繚乱する〈性〉への目差し——  
目次

凡例……………v

序……………1

第一章 〈性の博物館〉としての『風に紅葉』……………5

第二章 『風に紅葉』における男主人公大将を取り巻く人間たち……………31

第三章 『風に紅葉』における〈精進落とし〉の記事をめぐっての断章

——『源氏物語』撰取の新たな技……………59

第四章 『風に紅葉』と『恋路ゆかしき大将』との類似性をめぐって……………77

第五章 『風に紅葉』と『とはすがたり』との共通基盤

——〈性の被管理者〉から〈性の管理者〉へ……………89

第六章 『風に紅葉』拾遺……………117

第七章 『風に紅葉』続拾遺……………145

初出一覧……………181

後記……………183

## 凡例

『風に紅葉』の本文は大倉比呂志・鈴木泰恵編『校注 風に紅葉』（新典社 二〇二二・10）により、上段は共編著、下段は中世王朝物語全集⑤所収『風に紅葉』の該当箇所を記す。算用数字は巻（全集本では上・下）、漢数字は該当ページを示す。

さらに、第四章『恋路ゆかしき大将』（中世王朝物語全集⑧）、第五章『とはずがたり』（新編日本古典文学全集）においても、算用数字は巻、漢数字は該当ページを示しておく。

他の作品の本文は次の通りである。

- 中世王朝物語全集―『我身にたどる姫君』
- 新編日本古典文学全集―『落窪物語』『蜻蛉日記』『源氏物語』『栄花物語』『とりかへばや物語』『堤中納言物語』『催馬楽』『十訓抄』
- 新日本古典文学大系―『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』『新古今集』『昔話稲妻表紙』
- 講談社学術文庫―『今鏡』『梁塵秘抄口伝集』
- 岩波文庫―『風葉集』（王朝物語秀歌集）
- 佐藤亮雄校註『百座法談聞書集』（南雲堂桜楓社 一九六三・9）―『百座法談』
- 日本古典文学大系―『古今著聞集』『曾我物語』
- 日本思想大系―『たきつけ草』（近世色道論）
- 新典社校注叢書―『水鏡』
- 室城秀之『うつほ物語 全』（おうふう）―『うつほ物語』

なお、本文の一部を私に改訂した箇所のあることを御断りしておく。

## 序

『風に紅葉』をはじめとして中世王朝物語にはかくも多くの〈性〉にまつわる記述が多いのだろうか。本書は『風に紅葉』に関する七本の既発表論文をもとにしているが、密通をはじめとして、〈性〉を抜きにしては語ることができないほど、〈性〉との濃厚な関わりが特色となっているといえよう。『風に紅葉』と同じ中世王朝物語に属する『いはでしのぶ』や『我身にたどる姫君』にもその傾向が強いと考えられるわけだが、『風に紅葉』と比較した場合、〈性〉が占める割合は少ないと推察される。『風に紅葉』には多様な〈性〉の現象が語られてはいるものの、『我身にたどる姫君』の前斎宮が関わっているレスビアンはなく、〈性〉が網羅的に取り上げられているわけではない。にもかかわらず、『風に紅葉』では、〈性〉が抉剔されておられ、ほぼ同時代に成立したと推測される『とはすがたり』との関係も無視してはなるまい。<sup>(2)</sup>

さらに、平安時代に輩出した『落窪物語』や『古住吉物語』のごとき〈継子いじめ〉の話型は、中世王朝物語でも『白露』に継承されているのをはじめ、〈実子いじめ〉(『木幡の時間』)、〈嫁いじめ〉(『しのびね』)、〈妹いじめ〉(『風に紅葉』)のような〈いじめ〉が数多く語られるようになった原因は何によるのだろうか。今後、詳細な分析を行っていく必要がある。

ところで、太政大臣北の方と梅壺女御とは継母と継子という立場にありながらも、〈継子い

じめ)の要素は全くなく、あたかも仲の良い母娘のように語られているのはなぜか。それを(継子いじめ)に対する反措定だといってしまえば簡単だが、単純に反措定という一言では片付けられない問題があるように思われる。そのうえ、大将とその分身である遣児若君との間でホモセクシユアルが繰り広げられているように、継母子で良好な関係を築いている北の方と梅壺女御との間にレズビアンが成立しても不思議ではないのに、そのような状況が一切語られていないのにはいかなる理由があるのだろうか。レズビアンが語られている『我身にたどる姫君』と『風に紅葉』との成立の前後関係は不明としか言いようがないが、『風に紅葉』における大将と遣児若君との間で繰り広げられたホモセクシユアルは、例えば「もろともに隙間なう大殿籠りて」(2・六六。下・六九)、「例の隔てなく臥し給ひつつ」(2・七二。下・七三)と語られているように、抽象的な叙述にとどまっているのに対して、『我身にたどる姫君』では前斎宮と女房との間で「首を抱きてぞ臥し」て、「衣の下も静かならぬレズビアン状況が具体的に語られている点を考えると、『風に紅葉』は『我身にたどる姫君』以上のレズビアン状況を語り得なかったからこそ、『風に紅葉』ではレズビアン描写が回避されたのではないのか。とすれば、『我身にたどる姫君』は『風に紅葉』に先行することになろう。あるいは逆に、『風に紅葉』においてレズビアンが語られていないので、『我身にたどる姫君』ではそれが前面に押し出されて語られたのだろうか。そのような推測が成り立つとすれば、逆に『風に紅葉』が『我

身にたどる姫君』に先行することになろう。種々疑問点を列挙してきたが、現在のところ、それらに対する納得のいく解答を用意しているわけではない。

いずれにせよ、『風に紅葉』は(性の宝庫)である点は否めず、中世王朝物語の傾向として、『性』と(いじめ)の問題は看過できない。特に、『風に紅葉』で語られている(妹いじめ)に注目すると、故式部卿宮の姫君が異母姉の承香殿女御の里邸の「西の対」に居住させられているのは、院が姫君に触手を動かしたために女御の立腹を惹起したのであり、さらに姫君が追放されたのは、大将を恋慕している女御が大将と姫君との関係を察知した結果である点から考えると、この(妹いじめ)は(性)と密接に脈絡していると考えられる。とすると、『風に紅葉』は『落窪物語』の姫君に対する継母の(いじめ)とは質を異にしており、そこに中世王朝物語との差異化の一例が端なくも顕現しているのではなからうか。

最後に、平安時代物語と中世王朝物語との差異はどこにあるのかといった問題に関しては、<sup>(4)</sup>中世王朝物語のひとつひとつの作品を地道に研究し、それによって得られた成果を比較していくより他にはあるまい。

#### 注

(1) 辛島正雄『中世王朝物語史論』上巻所収の「女の物語」としての『我身にたどる姫君』女

帝と前齋宮と」(笠間書院 二〇〇一・5)の初出論文の題名は「『我身にたどる姫君』の女帝と前齋宮をめぐる断章―レズビアン物語の示唆するもの―」(『文学論輯』三十八号 一九九三・3)とあり、題名に「レズビアン」なることが使用されている。

(2) 詳細は本書第五章を参照されたい。

(3) 大将と遺児若君とのホモセクシユアルに関して、「身なりなど磨けるやうなる手触り、女のさまよりをかしげなり」(1・四一。上・三七)というような多少具体的な叙述も見られるが、前齋宮のレズビアン描写と比較すると、身体に対する感触が語られているのに過ぎず、『我身にたどる姫君』におけるレズビアン描写のごとき局部的具象性とは差異がある。とすれば、レズビアン描写の方がホモセクシユアルのそれよりも一歩先んじているのであろうか。

(4) 最近、千野裕子は『女房たちの物語文学論』(青土社 二〇一七・10)において、中世王朝物語に直接触れたものではないが、『源氏物語』と『狭衣物語』に語られている女房たちのあり方の差異に注目して、『源氏物語』と比較して『狭衣物語』では、「人物同士が近いところにいるにもかかわらず、情報の交換が適切になされない。ネットワークは存在しているのに、機能していない」と、新たな視点から両物語の差異を論じている点は注目される。